

「女性の偉大な能力についてのもうひとつの弁護」と女性観

江口聡

京都女子大学

eguchi@kyoto-wu.ac.jp

2003年11月9日

キェルケゴール協会秋季学術大会

概要

青年キェルケゴールのマスコミデビュー記事である「女性の偉大な能力についてのもうひとつの弁護」と中年期の『12の手紙』批評草稿を紹介し、19世紀前半の女性解放運動に対するキェルケゴールの態度を見る。

1 歴史的背景

- Christian VII の後をついだ Frederik VI のもとで 1930 年代にはデンマークの文化的「黄金時代」が訪ずれていた。
- シャルル 10 世の言論弾圧をきっかけとした 1830 年 7 月 27 日のフランス七月革命。七月王政へ。ルイ・フィリップが国王に。「自由と解放」がポイント。キェルケゴールの兄ペーター・クリステンセンはパリで革命を目撃。革命の思想はヨーロッパ全土に広がる。
- 1830 年代にも、デンマークでは依然として言論・出版には規制が敷かれており、革命思想の影響はそれほど大きくなかったが、フランス革命の影響で女性の解放という思想がデンマークにも輸入される。George Sand(1804-1876) の流行とサン・シモン派の男女平等思想。デンマークでも富裕層出身の女性が文化サークルに(主としてサークルのホステスとして)関与。
- 1830 年代には、Oehlenschläger にかわり J. L. Heiberg が権威となり、彼の文学サークルが隆盛。『コペンハーゲン飛行便』はハイペーアが編集。
- ハイペーアやシバーンは例外的に女性の知的活動を評価。J. L. Heiberg が 1833 春に、軍隊学校で哲学の入門講義の開催を計画^{*1}。男性とともに女性の聴講をも認めた。「新時代にたいする哲学の意義」と題した主旨説明の一部は次のようである。

「この一連の講義で、彼 [Heiberg] はすべての教育を受けたひとびとに対する哲学入門を講じる。たしかに、この希望はたいへん大きいので、彼は講義を男性だけに限らず、教育を受けた女性もまた、講義の真剣な探究に参加することができると思われる。通常、男性は女性よりも鋭敏でより一貫した理性をもっており、より大きな弁証の能力を持っているが、また通常女性は、真理を把握し、有限な考慮にまどわされることなく、無限なものを見るための、より確実で、より間違いの少ない感覚をもっている。

^{*1} 実際には女性の参加希望者が 2 人しかなく、開催されなかった。

女性の能力は男性の能力とまったく同じく有効であると考えられる。」^{*2}

- しかし一般には「女性の解放」や女性に対する教育は無益であり、嘲笑の対象になるべきであると考えられていた。キェルケゴールの1歳年下の学友 P. E. リン (Peter Engel Lind) のアイロニカルな文章が Heiberg に受けいられて『コペンハーゲン飛行便』第33号に掲載。キェルケゴールも34号でリンの論旨を補強する形で投稿。
- リンの論旨。大谷愛人は「女性の本性は、この世的、地上的正確のものではなく、エーテル的なもの、つまり、霊妙不可思議なものである、ということである」^{*3}としているが、もう少し内容がある。

2 P. E. リン、「女性のより高い素性の弁護」

Jean Paul その他のひとびとによって提出され弁護されている「最も偉大な詩人は最も偉大な哲学者である」という命題をもとにして、数学的原理にしたがって、偉大な詩人は偉大な哲学者であると推論すれば、そして預言者のようなヴィジョンの贈物をささげてくれた多くの詩人たちの作品を読めば、われわれは次のような確信にたどりつく。すなわち、女性の起源は地上的なものではなく、天上的なものである。この確信は、われわれのうちに深く根差しており、女性自身がより高い素性をもっていると直観しているように見えることからますます確証されているのである。それは、女性の軽い服装や、歩き方、話し方が、閉じこめられた魂が羽根を広げてまさに飛びさろうとしかのようにみえることからわかる。

古代の歴史に含まれている女性の本性についての見解は、わたしが今提出しようとしている原理に背くものではない。パラダイスでの女性のあつかいは、(創世記が実際の歴史を含んでいるとして) あきらかに、カインの兄弟殺しに典型的にあらわれているような過去の野蛮さを証拠として許されるだろう。後世と現在の大半は、女性を芸術作品としてよりは、有用な動産であるかのようにあつかっているが、これはアダムがイヴに対していただいていた妬みによって、部分的にせよ説明できるだろう(これは、ムハンマドとラビたちによれば、悪魔がアダムを妬みをもって見たのと同様である)。また一部は、女性は男性から作られたという事実を誤解したことによって説明できる。というのは、このような見方は、女性のなかに灰のなかからよみがえるフェニックスを見ないで、このように男性から創造されたのだから、男性は女性に対して、合法的な所有物として命令することができるのだと思いこんでいることが原因であろう。このようにして、われわれは次のような命題を提出することができるわけである。つまり、女性は崇拜の対象としてのみありえる天上的な存在であり、女性はその栄光を示すためにのみ行動するべきである、という命題である。

さて、時代はわれわれにおおまかには同意しているように見えるが、ここでより詳細な吟味を必要とする現象がいくつか存在する。聖バシリウスの「復活の際に女性は男性としてよみがえる」という不正確な原理にしたがって、ある男性たちは上の真理を認めようとしていない。特に、女性が学業に参加することを奨励することによって、男性を女性より上に置こうとしている男性たちがいる。ここではこの問題を拡大するつもりはないが、女性の名誉のために、われわれはこのような企てを女性自身はよしとしない信じることになろう。むしろ、われわれは女性が、このような誘いに対して、自分のより高い素性を誇ることをわすれてしまわないかを考えることにしよう。

最近、女性はしばしば男性から借りた姿で、つまり、ズボン姿で現われるようになった。それによって、“a potiori fit denominatio” (任命はより強い者によって行なわれる) という命題と同じような形で、男性を自分

^{*2} [1], p. 231

^{*3} 大谷愛人『キェルケゴール青年期の研究』p. 670

自身より上に置くようになった。そしてこれは女性が男性の優越性を認めることであり、そしてこれは、女性が学術講義に多数参加するようになったことを見るにつけ説得力を増している。しかしだからといってこのことがわれわれの命題を否定することになるわけではない。むしろ反対に、より詳細に見れば、われわれの命題により実質を添えることになる。最初の現象について言えば、さまざまなファッションと同様に、より高い存在の欲望が違った形で現われているのである。そして第二のものについて言えば、まちががなく、女性はそのような光景を見ることによって喜びを感じる他の人びとのために、このようにして自分自身に栄光をあたえているのである。

しかし、女性はそれでも、一貫していないしなければならない。

それゆえ、(1) われわれは、ジャン・パウルのように、女性（および子ども）がその深淵を失なってしまうように願うべきではない。むしろ、それをよりひきしめ、お互いに講義しあうことを求めるべきである。Claudius の作品での Chodowiecky の有名な銅版画のように^{*4}。

(2) また、女性が料理本のための化学知識を求め、鍋のなかで理性がいかに現実化するかを観察するため講義に出席することないよう求めるべきでもない。むしろ、女性が男連中に、彼女たちのより高い本性の結果所有している能力を教えこむよう求めるべきである。すなわち、ほとんど出費せずに暮す能力である。男性はそうでなければやがてなかが飢えであるかを知ることになり、よく知られた格言にあるように、その英雄的な強さを失しなうことになるだろうからである。

(3) 使徒パウロが言っているように、「女性は労苦して自分の手で正当な収入を得る」べきだとするのもわれわれの見解ではない。むしろ、女性が講義に出席することで使う時間を、これまで偉大な一貫性をもって行ってきた刺繍やビーズ細工に使うよう求めるべきである。というのも、このようにして目を痛めてしまうことによって、女性は物質的世界に対する彼女たちの憎しみを、日の光にさらし、それによって物質的世界より高いところに行くことができるからである。

P. E.

コメント

- リンは、歴史的に女性に対する差別的待遇が存在したという認識は持っていたが、知的な能力に関してはほとんど認めていない。
- 「形だけ男の真似をしても何の益にもならない」という揶揄。

3 ケルケゴール『女性の偉大な能力についてのもうひとつの弁護』“Ogsaa et Forsvar for Qvindens Høie Anlæg”, Kjøbenhavns flyvende Post, Interimsblad, 34, 1834.

- 1834年12月、コペンハーゲン飛行便32号のリンの記事につづき投稿。

女性がみずからの教育を求めることに対しては、理論的な方向でも、実際な方向でも、すでに多くの反論が

^{*4} アヒルがお互いに講義したり遊んだりしている絵らしい。

提出されています。この新聞の第 33 号でも、このことに関する皮肉が公けにされています。それは主として、講義によって女性に学術的な教育を提供しようとする最近の試みに関するものでした。しかしこれはなんと筋の通らないことでしょう！歴史上のいかなる時代にも、女性の偉大な能力は少なくとも部分的には認められていました。人類が創造されるやいなや、たちまちのうちにイブが蛇の哲学的講義の一聴衆となりました。そして彼女はいとたやすくそれを修得し、すぐに彼女の家庭生活のなかで実用することができたのです。このような思弁の才能と、これに関連したより深い知識への熱望の心は、すでにここにあわれています。東洋はこれを満足させようとしていました。それゆえ、女性はハーレムに閉じこめられたのです。そしてたまの旅人がこの聖地を訪れるたび、彼はかならずや知識への渴望に感銘を受けたでしょう。それゆえ、女性たちは、思考の訓練を妨害されないように、ヴェールを被ることになりました。しかし、すべての女性がこのようにして、より抽象的な主題を熟考するために生活から引き離されたわけではありません。大多数の女性は、生活のなかでその能力を証明しようとしていました。話し手として、女性はすばらしい能力を持っており、それゆえ女性は自分自身に特別な筋立て歴史を作ってきました。Bed-hanging Lecture やカーテンレクチャーなどです。そしてクサンチッペは女性的雄弁の一典型として、そして今日まで続く一学派の創設者として記憶されています。これに対してソクラテス学派はとうの昔に消えさってしまいました。キリスト教は、会合の席で女性に発言を禁じるなど、女性に対してきびしく対応してきましたが、家庭のなかに彼女たちの雄弁の闘技場を与えています。また、ラビたちは女性に自分で発言することを禁じていますが、それはただ女性がすばらしく光輝くことになるか、あるいはその愚かささをさらけ出すことになることを恐れているからです。中世には、数えきれないほどの魔女裁判が、女性が自然の秘密について深い洞察力を持っていたことを十分示しています。

しかし、女性の偉大な能力が正当に評価されるまでは、幾世紀も待たねばなりません。この役目を果たしたのはフランスで、ここでわれわれは二つの現象に言及することができます。フランス革命の根拠はひとりの女性によって代表されたこと、そしてサン＝シモン派が女性をまったく男性と同じ立脚地に起こそうとしていることです。もし、これにどんな男性も女性に議論で勝つたためしがないこと、女性の弁論の能力が多くの論敵を沈黙させてきたことをつけ加えるならば、女性の知的なことがらにおける優越性、心的な能力の全般におよぶ女性の優越性がはっきり把握できることになるでしょう。そしてこれはおそらく、それでも結婚した女性たちでいっぱいの方の方が、その認識力や創意の点において、男性の部屋よりもはるかにまさっているからでしょう。

また、われわれの時代においても、女性の偉大な才能の例に足らぬところはありません。女性によるいくつかの劇場作品新しい事例によって、決疑論が豊かになり、騒動が引き起こされています。ここ数年、魂の不死を証明したのはひとりの女性だけです。それはクリスチャンヌ・ローゼンの料理本とともに、多くの家庭で生活の維持に役だっています。女性たちは急ぎ足でその気高い目標に向っています。美学においては、文学批評が女性によって提供されています。医学では、健康局が女性にピッチ帽子を作る許可を与えています。美術においては、女性はもっとも崇高な主題にとりこんでいます。女性はキャンパスの上に超自然的な存在を描きだし、美術を普及させるために男性とともにとりこんでいます。工芸となると、彼女たちは靴下から手袋を作るという発明をなしたはじめての人びとです。歴史に関しては、女性はさまざまな事件の進展をすぐさま知り、男性が意味がないとみなしている新聞や雑誌も、彼女たちの鋭い目を逃れることはできません。ファッション雑誌で彼女たちは時代の精神を学んでいるのです。それゆえ、あなたがた偉大なる男性たち、女性を知識の頂点にいたらせ、他の性を忘れないようにしている男性には感謝しなければなりません。それゆえ、女性に特別に影響を与えようとしている男性が、その博愛主義的な熱意をすべての人びとにまで拡張し、男性を忘れていないということは好ましいことです。わたしは喜びをもって、女性が愛が本当はどんなものであるかを自分自身にあきらかにし、暖かさについてのはっきりした概念を持ち、歴史研究において厳密

さの点で男性を上まわる日が来るのを楽しみにしています。というのは、女性は Hagbart と Signe^{*5}が晚餐に何を食べたか、そもそも彼らは食事をしたのかどうかを知ることになるでしょうし、三位一体の秘密を深く探究することになるでしょうから（三位一体は女性には特に難しいとわかるでしょう。というのは、そもそも二人の意見を一致させるのでさえ彼女たちにとっては困難なのですから）。それゆえ、中世の騎士道の時代、違う世界にもどりましょう。古き時代に、女性たちを裁決者として認めたのと同様に、いまや博士論文も、演劇も、哲学作品も、あなたがた女性の判断にまかせられるべきです。それぞれの騎士が、それぞれの貴夫人の色をまとっていたのと同じように、もはやカント派やヘーゲル派などをひきあいにだしてはなりません。いやむしろ、かわりに青組、赤組などになるべきなのです。われわれはイブの手から知恵の木の実を受けとることになるでしょう。だから、飛びなさい！地上から。すでにあなたたちは飛ぶ鳥の翼の上で変身しつつあります。あなたが袖に空気を入れてふくらませば、女性が天に登るのを見ている多数の目から消えることができるでしょう。だから、この恩知らずの地上から、飛んでください。あなたたちの哲学の翼をかがげ、古代のユダヤ人^{*6}たちのように、ぜいたくな生活にとどまりたいと願う憶病で卑屈な人びとがを軽蔑しなさい。そして、この寒い冬、男性がその罪を後悔しているとき、春はあなたたちにほほえみかえすでしょうし、そのとき女性はまた男性に手をさしだすでしょう。スノードロップと冬の馬鹿^{*7}。

コメント

- 21 歳という年齢を考えれば、この文章は単なる知的な遊戯にすぎないとみなすこともできる。一般には、機知と皮肉の才能を見せるためだけの文章と解されており、最近まで研究の対象となっていない。
- この文章の意義として、大谷は当時のケルケゴールが三位一体論に対する「懐疑」をいただいていたことを強調する。しかし文章を見るかぎり、まじめに考えている様子は見られない。
- 女性に社会的地位に関する実際的な無関心が見える。のちのケルケゴールが「美的実存」の特徴として指摘する事柄への無関心 disinterested な態度が出ている。
- ハイペーアの文学サークルには、彼の母親 Thomasine Gyllembourg や妻 Johnne Luise をはじめとして教育を受けた女性が多かった。また彼は 1919-21 年にパリで女性たちとともに教育を受けている。先に挙げたような女性に対する哲学教育の試みなどはハイペーアにとっては なんら奇妙なものではなかった。しかしケルケゴールは家庭においてはほとんど教育を受けた女性を知らなかった。（母親は文字を読むことはできたが文章を書くことはできなかった。）
- リンのように女性は家事しかできないとまでは考えていないが、女性が知的な活動にたずさわることに対する皮肉な文章である。Julia Watkin は 正真正銘の男性優越主義 “male chauvinism” の典型と指摘。
- もっとも、歴史的に女性が置かれていた状況に対する一定の理解をもっている。また、文学批評、演劇、美術などでの女性の活動にも言及し、一定の関心をもっていたことを示している。
- サン＝シモン派に対する言及から、当時の社会運動について一定の知識をもっていたことが見られる。
- リンがジョルジュ・サンド個人を揶揄したのに対し、ケルケゴールは社会運動を揶揄していることは注意が必要。 のちのケルケゴールの大衆批判に通じる態度。

*5 デンマーク伝説の英雄的カップル。

*6 出エジプト記 16:3

*7 イースター時に友人に送る匿名手紙の決り文句。「私が誰だか当ててごらんなさい」か

4 『もうひとつの弁護』とキェルケゴールの女性観

- 「女性の解放」に反対するキェルケゴールのこのような立場は、『あれか = これか』と『人生航路の諸段階』でのヴィルヘルム、あるいは『愛の業』などではっきり明言されている。公式には次のように男女の平等性を認めている。

ところで私は、キリスト教の中で育てられた。それで、私が女を解放しようとする一切の見苦しい試みを是認することができないのと同じように、一切の異教的な懐古も、私には愚かに思われる。私の短くて単純な意見は、女はたしかに男と同じくらい良い、それでおしまい、というものである。性の区別についてのこれ以上長たらしい説明、あるいはどちらの性が優秀かについての熟考などはみな、怠け者や独身者の怠惰な考えごとである。(『人生航路の諸段階』)

- しかし、世俗的には女性は男性に隷属するべきである。

「女性の自由というのは、自分の主人になる夫を選ぶということにある。」

「この世で女性に男性と同等の権利を与えるためにどれほどの戦いが行なわれてきたことか。しかし、キリスト教はひたすら無限の変化のみを、だからいとも簡単に成就するのである。外面的にはある意味ではどこまでも古いものに留まる。というのも、男性は女性の主人たるべきであって、女性は男性にかしづくべきだからである。だが、内面性においては一切が変わったのである。彼女がこの男性を 主人に したい、なぜなら、これ以外に彼女が彼を手に入れるすべはないのだから、ということ自分の良心に諮ったかどうかという、女性へのささやかな質問によって変わったのである。それにもかかわらず、良心の問題に関する良心の 問いかけは、彼女を内面性において、神の前に男性と完全に平等たらしめるのである。・・・愚かな人びとは愚かにも、女性が男性と平等の権利を与えられることを、キリスト教の名において世俗的に明らかにすることに熱中した。こんなことをキリスト教が要求したり、望んだりしたことは一度もないのである。もし女性がキリスト教的にキリスト教的なもので満足しようとしさえすれば、キリスト教は彼女のためにすでに一切をなし終えているのである。もし彼女にその意志がなければ、彼女は自分の失うものに対するお粗末な代償を、彼女がこの世で強引に手に入れることのできるわずかばかりの体裁の中に獲得するに過ぎない。」(『愛の業』、邦訳 p. 201)

- このような女性解放に反対する理由のひとつは、時間的なもののなかでは、男性と女性には自然が定めた制約が歴然としているからである。

「キリスト教は男性と女性を平等にする、そしてそれゆえ女性はキリスト教に対して男性と同じように関係しなければならぬ、というのは根拠のない話である。キリスト教はたしかに男性と女性を平等にするが、しかしそれは自然による制約を変更するわけではない。そうでなければ、同じ論理によって、キリスト教は女性を男性と同じくらい背が高く筋肉質にするとさえ結論できるだろうからである。さらには、キリスト教においては子どもを産む仕事を混乱させ、時には男性が、時には女性が子どもを産むというようなことにさえなるだろうから。」(JP, 5008, 1854)

「ある意味で、女性はその本性からして本質的に宗教的な奉仕に向いている。というのは、自分自身を捧げることが女性の本性だからである。しかし一方、女性は何にも解明しない。高度に男性的な知性が、女性的従属に加われば これこそ宗教的である。女性の献身は本質的に感嘆

の言葉に限られている。そしてもしそれ以上であれば、それは女性的ではない。しかし一方高度に男性的な知性は直接に巨大な利己心へと関係する。これは従属のなかで消滅させられねばならない。(JP 5006)

- 女性の解放は社会の構造を揺るがす。 墮罪の罰により男女は性分業を行なうようにさだめられている。男は額に汗かき労働し、女性は生殖する。女性の解放を求める女性は額に汗をかき運動することで定め反しているということになる。
- 女性解放に反対するもう一つの理由は、「群衆」批判にある。女性の「解放」は女性自身にとっても(人類にとっても)有益ではない。

「結局のところ、女性がより自己犠牲的であることはたいしたことだ。それはおそらく、女性は男性より静かにひかえめに暮しており、それゆえほんの少し理念性に近いからだろう。女性は男性のように市場価値を手に入れる必要がない。男性は生涯のはじめから絶えず活動しなければならない。女性の救いになるのは、一定の期間生活から離れることができるということだ。このより静かな生活が、女を男より自分自身にしてくれるものなのだ。男は子どものころから他人と同じようにならなければならないということによって墮落させられてしまう。そして大人はもちろん、青年期でさえ、現実生活でどうするかといったことを学ぶことによって墮落してしまっているのである。まさにこのような知識が、彼にとっては破滅なのである。もし少女たちが同じように育てられたとしたら そのときは人類よ、さようなら、だ。女性の解放は、この種の教育に向う傾向があるのだが、それはまちがいに悪魔の発明である。(JP 4992, 1849)

- 50 年ごろには、実際の女性解放運動家たちを批判している。
Fredrika Bremer (1801-1865) スエーデンの女性参政権運動家との手紙のやりとりと日誌記述。1848 年にコペンハーゲンを訪問していた Bremer に『人生航路の諸段階』に関するディスカッションを誘われたが、キェルケゴールは招待を断わる。^{*8}
- Mathilde Fibiger (1830-1872)。新憲法制定の際、選挙権が男性にしか認められなかったことに抗議。しかし、参政権や労働の機会よりは、個性の発展を重視。『クララ・ラファエル:12 の手紙』(1850) と『解放とは何か』(1851) で一躍文学サークルの中心人物となる。単に参政権の問題ではなく、「個人の発展」における制約からの解放の問題であると主張。家族の反対に会い文学活動を止め、家庭教師や電信師として働き、貧窮のうちに死亡。

^{*8} 1949 年 Frederikke Bremer は『北国の生活』を著し、キェルケゴールの『人生航路の諸段階』に批評を加えた。以下はその批評に対する日誌での反応である。

「Frederikke Bremer はこの解釈によっていろいろなサークルで人気者になるだろう。
わたしはここで生活し、おそらく最高に苦しい殉教の道に自分を晒し、堪えつけている。嘲笑されるという殉教(背景が限定されていること、そしてわたしの資質と業績が一般に知られているということのため二重に苦しい)。恐るべき心理的・精神的緊張によって、わたしは、経済的な犠牲に直面しても著作を続けている。しかしわたしが状況についてのコメントは一行たりとも省略しないことはよく知られている。Frederikke が見るところでは、わたしはあまりにも病的でかんしゃく持ちで、お天気であって欲しいと思っているときに太陽が出ないだけで苦しむらしい。このうぬぼれたオールドミスが、馬鹿な売春婦が、おまえはやってくれたよ！ 同じような色々なサークルがこの解釈に参加することになるだろう。一方ではマーテンセン、パウリ、ハイペアーなどが。一方ではゴールシュミットや P. L. メラーが。すばらしい古きよき世界だ。マーテンセンは、監督 Bishop になり、ベルベットにくるまねなければ、そして Frederikke が彼のところに毎日やってきて *Dogmatik* を読み、証明書を手に入れるようなことがなければ(これはよく知られた事実だ)、「神と彼の良心」の証をたてることになったかもしれない。ゴールシュミットは宣言するだろう。「すばらしい古きよき時代だ、わたしにはいつも 3000 人の講読者がいたものだ」と。まったく、すばらしい世界だ。キェルケゴール修士だけがあまりにも病的でかんしゃく持ちで、お天気であって欲しいと思っているときに太陽が出ないだけで苦しむのだ。(JP 6493)

5 『クララ・ラファエル、12の手紙』批評草稿

- キェルケゴールは、Clara Raphael (Mathilde Fibiger), *Tolv Breve*, edited by J. L. Heiberg (Copenhagen: 1851) に対する批評の草稿を作成したが、出版されなかった。
- 若い女性クララは政治・宗教的な偏狭さに反抗し、個人の理想のために生きる決意をする。実際には結婚するが、夫とはプラトニックな関係にとどまり、彼の援助によって新しいライフスタイルの構築をめざす。

「若い女性。姓名: クララ・ラファエル。年齢: 20 歳。容貌: 美人。宗教: 自由思想家。職業: 商人宅の家庭教師。性格: 独創的、彼女自身によっても、友人のマチルデによっても、彼女が家庭教師をしている近隣の善男善女によっても 彼女はまた同じくらい独創的な思想を持っている: 「わたしも独創的になるわ」。とても独創的だ!

おそらくこれはあまりにも不適切なカテゴリーに思えたので、彼女は結婚しないで生きられる思想をさがす。というのは、彼女は結婚したいという願望をもっていなかったからである。そしてこれがその思想である 女性の解放。これがすべてだ。彼女の手紙は、彼女自身の思想にはなにも具体的には触れていない。それは十分独創的だ。もしその思想がもっと具体的だったとしたら、彼女はおそらく他の人びとをそれを共有できただろう。しかし彼女は自分の独創性を守ったのだ。

彼女が選択した思想はあまりにも抽象的なので、それは彼女の結婚をさまたげるようなものではないし、10 歳の子連れの子や男もめと結婚することでさえ許すようなものだ しかしくララ・ラファエルは結婚しないと決めている。彼女は自分の思想のために生きるのだ。なんと理解できないほどの独創性だろう! 思想が貧弱であればそれだけ、それに固執することは独創的になる。しかしもちろん、その思想がそれほど抽象的でなければ、つまり空虚でなければ、つまり、そもそもまったく思想ではない場合には、それだけ決断も要求されない。基本的に、その思想はそれなりの決定をもたらすのだが、そしてそれはたいして決断するという問題ではなく、結婚しないという決断をするわけではない。というのも、結婚する時間がないからである。それというのも、思想が緩徐の生活と時間を占めてしまっているからだ。

ある日彼女は聖餐会に行く、そこは彼女のような自由思想家にはとても独創的なものだ。少女のあいだ、彼女はあきらかに異常な宗教教育を受けたい。これは読者も編集者もとても十分には誉めつくせない。マグナス・エリクソンのバプティストと三位一体についての本をほんの少しでもよんでいれば。

ある日彼女は聖餐に行く、そして神に、自分は自分の思想のために生きると誓う その誓いの独創性のために神も当惑してしまうだろう つまり、彼女は実際にはなんの思想も持っていないのだ。

彼女は誓いを立てる。そして家に帰り、 恋に落ちる。

しかしくララ・ラファエルはチャールズのように単に美德に欠けるだけではない。しかし彼女はヒロインなのだ 彼女は結婚しようとしなない。

この決心によって生じた苦しみによって、彼女は病気になる。誰も彼女が苦しんでいることを知らない、と彼女の親しい友人は語る。そしてそれをよりよく知っている人はいないのだから、誰もそれを知らないというのはまったく真実なのだ。

いや、彼女は修道院に入りたいと思う、彼は自分の思想のために生きようとする。 そしてけっ

きよく、まったく新しい秩序を発見するのである。つまり、彼女は恋人と結婚するのだ　しかしそれも兄と妹として。

たしかにまったく独創的な修道院だ！

この独創的な思想について、ほんの少し考察してみよう：兄と妹の結婚という思想について。小説を読めば、次のようなフレーズに触れることができる。「わたしは彼を高く評価しています。しかしわたしは彼を愛することはできないのです。」そして「わたしは彼を妹としてしか愛することができないのです」このようなことは、通常、その二人は結婚しないということを意味する。それならば、あまりに独創的すぎて理解できないというほどではない。しかし、彼らが結婚するということは、まったく独創的な展開、猥褻であるほどの展開の印となる。これは誰もが疑いなく同意してくれることだろう。同じ衣裳筆筈に男女の衣服をつるすのが卑猥であると考える Zierlich 氏ほど情け容赦ないとすればのことであるが。もしこのようなことが押し進められれば、まもなく男どうしも結婚したいと願うようになるだろう。これは、兄妹が結婚するのとおなじほど猥褻なことである。

この本には異常な特徴がある。編集者（一時は体系の下僕であり、忘れがたき約束の主であり、のちには受肉したとはいえないまでも天文学的に昇天した大教授、現在は修道院、クララ修道院、クララ・ラファエル修道院の闘士であり主催者である）、劇場監督、ハイペーア議員、デンマーク騎士、によって、長々しく詳細な序文が付されているのである。この序文で彼は彼の全力を尽くして、いかにこの本がすばらしい作品であるかを誉めそやしている　そしてこれはおそらく彼が自分とこの作品に対してできる最悪のことであろう。彼はこれがプロテスタント的修道院の思想であると言っている　どの思想だろうか？結婚することが？いや、結婚しないことが、しかし、男と妻として結婚せず、むしろ兄妹として結婚することがである。つまり、劇場的結婚　これがプロテスタンティズムが、修道院ということで、そして思想のために独身を通すということと理解することだということだ。

編集者は臆面もなくこの発見に対して称賛を送り、この思想を世界に広めたことでラファエルを称賛している。クララ・ラファエルの三位一体についての学説のようなものに対してのあるべき反論を述べずにすませている。おそらくこれは、このような貢献にマーテンセン教授が激怒するであろうことを予測してのことであろう。というのは、マーテンセン教授は彼の *Dogmatics* において、修道院を来世に先送りしており、そこでわれわれ死者すべては用心深く結婚を避けねばならない、アダムとイブが創造されたときよりも用心深く結婚を避けねばならないと述べているからである。

もし誰か別の人間がこのような宗教的領域への美的な侵略を咎めだてしないとすれば、わたしは少なくとも沈黙してはられないというものだ。」(JP 6709, 1850)

6 Julia Watkin による解釈

- このような女性解放運動に対するキェルケゴールの態度をどう見るか。
- キェルケゴールは異教のカースト制度のなかでの差別には敏感であったが、キリスト教文化のなかでの女性差別に鈍感であった。また、男女の性差がどの程度社会的に条件づけられたものであるかについてもなんな反省を行っていない。
- キェルケゴールはまた社会的不平等の問題を意識してはいたが、その修正は違いを受け入れることによってのみはじめることができると考えていた。この立場はレッセ・フェールの維持につながりやすい立場である。

- 最初期から見られるキェルケゴールの女性解放運動批判は、個人の変革 reformation に対する立場の違いとして理解するべきである。キェルケゴールは社会変革の前に、むしろ個人の変革が必要であると考えていた。
- サン＝シモン派のようにユートピアを夢想するのではなく個人の神の前での根本的平等性と宗教的・倫理的自覚にもとづけている点は評価できる。
- ヴィルヘルムは結婚を男女の義務としたが、それを逸脱するより高い存在様式があることをも認めていた。したがって、ヴィルヘルムの場合でも結婚は実存の唯一の目標ではない。
- キェルケゴール自身は女性の実存に対して固定的な見解を抱いていたが、思想そのものはもっと広い解釈の余地があり、女性もまた実存的選択によって自己を生成することができるという解釈することができる。
- しかし、Julia Watkin のような解釈の試みは不可能ではないにしても、歴大なキェルケゴールの男性優越主義的な記述からは読みとることができない。Watkin のような解釈が可能になるのは、『愛の業』での先に挙げた引用にあらわれるように、世俗的な平等と宗教的な平等を完全に分離してしまい、世俗的な生活での平等や世俗的な幸福や自己実現などにほとんどなんの価値も見いださないことが可能となるときのみ。青年キェルケゴールがひきあいに出しているサン＝シモン派などにとって、19 世紀前半の労働者の困窮は現実のものであった。

6.1 Brigit Bertung による解釈

- Clara Raphael 批判のポイントは、クララが「グループ」としての理想にしたがって生きようとしているにすぎないこと、また、兄妹のようなプラトニックな結婚を行なうというという値下げを行なってしまったことによって、その理想に実際に従って生きることには失敗してしまっているところにある。キェルケゴールは女性の個人的解放に反対しているのではなく、グループ、集団、群衆として解放されようとする「抽象的」思想に反対しているにすぎない。
- この解釈はキェルケゴールの他の思想から導かれる解釈としては魅力的。しかしその根拠が薄い。
- 19 世紀なかばヨーロッパ思想界でのキーワードである (Fibiger や J. S. ミルが擁護するような) 「個人の発展」「個性の発展」について、キェルケゴールは実際のところどのような態度をとっていたのか、という問題。キェルケゴールは個人の課題は神によってあらかじめ定められていると考えている可能性がある。キェルケゴールが「個人」の実質的な内実・多様な内面性をとらえていたのか (他の人びとのほとんどは、彼に匹敵するような個性や内面は持っていないと思っていた?)。

7 見通し

- 彼の大衆メディアに対する態度と同様、女性観も今世紀まで続く保守的な立場を代表している。政治的・社会的保守の源流としてのキェルケゴールというテーマは、現代社会を見直す上で重要。
- キェルケゴールの女性に対するステレオタイプ的な見方は生涯変わることがなかった。しかし先にあげた JP 4992 ではキェルケゴールは環境や教育が人格の形成におよぼす影響を認めている。彼はどの程度彼自身、あるいはわれわれは社会的に条件づけられていると認めるのか。

- キルケゴールの著作活動全体^{*9} は、レギーネ体験というよりは、一貫して性役割や大衆社会の問題をめぐっているのだと再解釈することが可能であり、この見地からの研究が必要。

参考文献

- [1] Søren Kierkegaard, (Julia Watkin (tr. & ed.)) *Early Polemical Writings*, Princeton University Press, 1990.
- [2] *Søren Kierkegaard's Journal and Papers*, ed. and tr. by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Indiana University Press, 1967.
- [3] Kierkegaard, *Letters and Documents*, tr. by Henrik Rosenmeier, Princeton University Press, 1978.
- [4] Julia Watkin, "Serious Jest?: Kierkegaard as Young Polemicist in 'Defense' of Women", Robert L. Perkins (ed.), *International Kierkegaard Commentary: Early Polemical Writings*, Mercer University Press, 1999.
- [5] Brigit Bertung, "Yes, A Woman Can Exist", Céline Léon and Silvia Walsh (ed.), *Feminist Interpretations of Søren Kierkegaard*, The Pennsylvania State University Press, 1997.
- [6] キェルケゴール 『人生航路の諸段階』、國井哲義訳、創言社、1996。
- [7] キェルケゴール 『これか あれか』第二部、渡邊裕子、近藤英彦、大谷長訳、創言社、1995。
- [8] 大谷愛人 『キェルケゴール青年時代の研究』、勁草書房、1966。

^{*9} 女性や結婚を直接に問題にしている『あれか = これか』と『人生航路の諸段階』、性の問題を扱う『不安の概念』、『死に至る病』の男女の絶望、『愛の業』、『危機』や『二つの時代』などの批評群、等。